続 とちぎのサムライ vol.33

全国津々浦々

お城めぐりの旅

幕末の動乱「北海道の城」

ここ数年、城址歩きをしていると、さまざまな城と歴史に関わることになります。毎回のことですが、自分勝手に書いておりますので、史実と異なる部分があるところはご容赦願います。

(一社)宇都宮建設業協会　木　澤　喜　人

北海道旅行で函館に行かれた人は、必ず五稜郭に立ち寄ると思います。幕末の動乱の中、箱館(江戸時代まで「函館」は「箱館」と表記されていました)戦争にまで進展した歴史の流れの一部を改めて振り返ってみたいと思います。幕末になぜ幕府が五稜郭を築城したのかというと、1853年の黒船来航に端を発します。ペリーによる開国の要求に屈した幕府は、1854年に日米和親条約を締結し、函館を開港しました。幕府は函館を治めるために奉行所を設置し、産業の育成・開拓・防備強化することを考え、緒方洪庵塾に学び洋学者でもあった武田斐三郎に設計を指示しました。ヨーロッパの「城郭都市」をモデルとする要塞を考案し、約７年かけて完成させました。同様な形状の城跡は、日本では函館の五稜郭と長野県佐久市の龍岡城五稜郭の２ヶ所だけです。

「五稜郭」

五稜郭は、死角をなくすため稜堡(りょうほ)と呼ばれる５つの角がある星形になっており、この五角形となる土塁と石垣の周りには水堀があります。さらに、この星形の土塁の南西側には半月堡(はんげつほ)または馬出塁と呼ばれる三角形状の土塁があり、その周りもまた水堀となっています。出入口にあたる所には、外から直接五稜郭の中を見えなくするための土塁「見隠塁(みかくしるい)」があります。五稜郭を形作る土塁は幅約27mから30m、高さ約５mから７mで造られています。五稜郭の大きさは、堀の内側は約12万5,500㎡、東京ドームの約３倍の広さがあり、水堀の幅は最大約30m、深さは４mから５mで、この堀の外周りは約1.8㎞の長さとなっています。五稜郭の中心部にある奉行所では、(１)蝦夷地の統治、(２)開港に伴う諸外国の応接・交渉、(３)海岸防備などの業務を行っていました。

箱館奉行所跡（復元）

半月堡の石垣（上部 忍び返し）

1867(慶応３)年、江戸幕府に対して倒幕運動が進み、徳川慶喜が朝廷に大政奉還すると、五稜郭は箱館奉行所から朝廷に明け渡されます。箱館奉行所が奉行所としての役割を果たしたのは、明治維新までのわずか４年間だけでした。1868(明治元)年には、旧幕府軍と新政府軍による戊辰戦争が京都の鳥羽伏見で勃発。旧幕府の海軍副総裁・榎本武揚の率いる旧幕府軍が蝦夷地に上陸し、無人となっていた五稜郭を占拠します。ここに、新選組副長・土方歳三も加わった旧幕府軍が「蝦夷共和国」を建国し、箱館政権を誕生させました。約半年の間、新政府軍と旧幕府軍の最後の戦争が道南の地において繰り広げられることとなりましたが、圧倒的な戦力を持ち、時代の勢いを背負っていた新政府軍にかなうはずもありません。明治新政府軍の箱館総攻撃が始まり、次第に形勢不利となっていき、敗北は決定的なものとなりました。1869(明治２)年５月18日、旧幕府軍が降伏して箱館戦争は終結。五稜郭は新政府軍に明け渡され、再び明治政府のものとなりました。幕府最後の拠点として蝦夷地で独立を果たすという夢はもろくも瓦解したのでした。私の中で、五稜郭にまつわる人物といえば、新選組の鬼の副長・土方歳三です。

江戸出身で、同郷の近藤勇と共に新選組を作り上げました。各地で転戦した後、1868（明治元）年の箱館戦争の際、土方は海軍副総裁の榎本武揚と共に函館に渡ります。榎本武揚は、江戸城が無血開城し江戸幕府がなくなった後、行き場のない武士のために北海道を開拓して蝦夷共和国を作ろうとしていました。1869（明治２）年の５月11日、最後の戦いで土方らが率いる旧幕府軍は、新選組らが抵抗している弁天台場を助けに向かっていました。その途中「一本木関門」付近での戦いの最中に、土方は馬上で銃に撃たれて35歳でこの世を去りました。時代の流れに逆らい、武士として誇りを持ち、愛刀を振るって戦った土方が最期は銃弾に倒れるという、何ともやるせない結末でした。

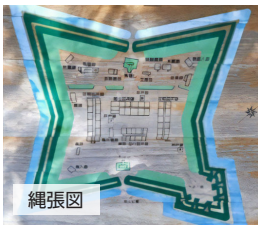
土方歳三ブロンズ像

土方歳三最期の地「一本木関門」

土方歳三は当時から女性たちに人気があり、現地では今も若い女子たちに圧倒的な人気があります。いつも花が添えられたり、ブロンズ像と一緒に写真を撮ったりして賑わっています（羨ましいな～）。

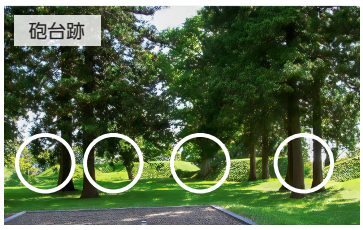
「松前藩戸切地（へきりち）陣屋」

開国直後の1855（安政２）年に行われた江戸幕府による北方防衛のためと、それに伴う函館平野一帯の警衛分担のために、幕府の命で松前藩が陣屋を構築しました。設計者は佐久間象山が開いた洋学塾「五月塾」に学んだ松前藩士の藤原主馬で、日本で初めて稜堡式築城術に基づく星形堡塁構造を本陣に採用していました。五稜郭の築城とほぼ同時期の築城であり、五稜郭の影響を受けて稜堡式城郭として設計されたのではないかと思われます。


縄張図

大手門前

明治元年に箱館戦争で榎本軍の進撃を受け退却する際、守備隊により自焼・放棄されました。

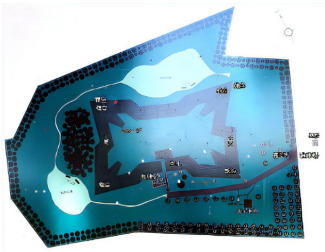


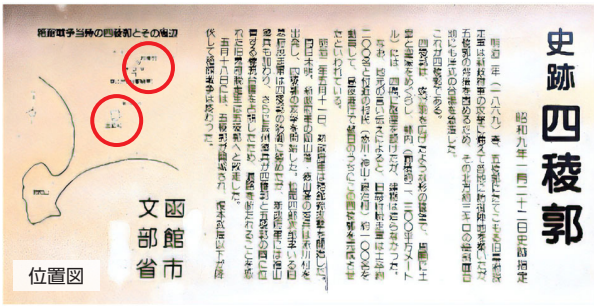
東側の先端がそのまま砲台となっています。この部分の城塁は６ヶ所切り込まれ、砲を配置できるようにしてあります。

17棟の建物があり、120名ほどで守備していたようです。陣屋の総面積は４万3,400㎡、形状は四稜の星形で、東南部の稜堡に六門の砲座を配置していました。

「四稜郭」

四稜郭は、箱館戦争の際に榎本武揚らが1869（明治２）年に五稜郭の背後を固めるための支城として、洋式築城法により急造しました。建設には大鳥圭介らが指揮を執り、旧幕府兵卒約200名および近隣住民約100名が徴用され、昼夜兼行の突貫工事で完成させました。しかし、堡塁としては脆弱であり、立てこもるには手狭で、井戸等の設備も間に合わなかったようです。同年５月11日、新政府軍は箱館総攻撃を開始しました。旧幕府軍は四稜郭の防御に努めましたが、四稜郭と五稜郭の間に位置する権現台場を新政府軍に占領されたため、退路を断たれることを恐れた旧幕府脱走軍は五稜郭へと敗走しました。


配置図



位置図

四稜郭は蝶が羽を広げたような形の堡塁で、東西約100m南北約70mの範囲に、幅5.4m高さ約３mの土塁が巡り、その周囲には幅2.7m深さ0.9mの空濠が掘られています。また、土塁の南西側には門口が設けられ、郭内（面積約2,300㎡）の四隅には砲座が配置されていますが、建物は造られませんでした。しかし、平地の真ん中にこの程度の土塁を築いただけの城では近代戦では役に立たず、新政府軍の攻撃を受けて数時間で落城してしまいました。旧幕府軍は、長い鎖国によって世界の大きな変化を知る由もなく、戊辰戦争の時も兜をかぶり、槍・刀・火縄銃で新政府軍との戦いに臨み、そんな時にも幕府の中で勢力争いが続いていました。人数だけは新政府軍に勝っていて、武士道の精神で戦うことを真剣に考えていました。現在はもっと時代の変化が速く、流れに全然付いていけない虚しさを切実に感じる今日この頃です。